



位置天文学，天体力学，暦法（こよみ）の権威であった古川麒一郎先生が6月29日に亡くなられた。享年86歳。先生は，1929年7月22日大阪市生まれ，間もなく87歳の誕生日を迎えられる前の逝去であった。先生は，今年5月1日に88歳で亡くなられた長谷川一郎先生夫妻の仲人で1960年に奥様鈴木様と結婚され，二人のお子様をもうけられた（長谷川先生については天文ガイド7月号 p.138～139を参照）。1969年には「浮遊天頂儀緯度観測の統計的誤差」の研究で，京都大学から理学博士の学位を受けられた。その後，先生は，長きの間，水沢緯度観測所や東京天文台（現，国立天文台）に勤務された。

さて，先生は，すでに1947年頃から小惑星や彗星の軌道計算を行なっている。さらに1960年代には，大型電算機（コンピュータ）による軌道計算を始められた。当時の国際天文学連合（IAU）の天文電報中央局の回報（IAUC）には，先生の計算された軌道がいくども登場している。また，彗星の軌道は，多くの場合，後進の新しい軌道に置き換えられるが，今でも，マースデンの彗星カタログ（最終版）には，本田彗星（1947 V1）と大道・藤川彗星（1970 B1）の軌道が掲載されている。

古川先生は，長谷川先生とは違いプロとしてその生涯を歩まれた。そのために古川先生になじみのある方は，少ないかも知れない。しかし，この「先生を偲んで」をお読みいただければ，どんなに寛大で優しい家庭的な大先生であったことがおわかりいただけるだろう。特に私は古川先生からは，長谷川先生ともども，軌道論以外にも，多くの人生論，社会論をお教えいただいた。二人の先生は，私の父と比べて，先に亡くなられた長谷川先生とは7歳差，古川先生とは8歳差しかない。生涯，父と仲が悪かった私にとって，二人の先生は，父親以上の人生の師でもあった。ご冥福をお祈りします。



写真1. ありし日の古川麒一郎先生（2005年11月20日）。喜寿のお祝い会；藤井旭氏撮影。

なお，先生のお葬式では，私は先生の一番弟子だと紹介された。長谷川先生は，ともかく，プロの道を歩まれた古川先生には，もっと優秀な一番弟子の方がおられたことに間違いはない。このことは，1984年，東京で長谷川先生が「おい。古川くん。こいつ（私）は，

軌道論を何にも知らん」と話されるとき、古川先生は「何を言っているんだ、長谷川。お前は若い奴との付き合いがないので、最近の若い奴を何にも知らん。俺は、多くの学生を指導しているが、こいつは、その中で、まだ、ましな方だ。それに俺の一番弟子に失礼なことを言うな……」と私をかばってくださった。すると長谷川先生は「それを言うなら、こいつは、お前ではなく、俺の一番バカ弟子だ」と言ったとか、言わないとかで「一番弟子」と呼ばれるようになってしまったらしい。

ところで、古川先生が軌道計算を行っていた 1960 年代から 1970 年代にかけて、我が国アマチュアによる新彗星発見は、その全盛期を迎えていた。また、多くの彗星観測者も育てていた。そのこともあって、1971 年に愛知県蒲郡市で第 1 回彗星会議が開催された。そこで、広く一般にアマチュアの活動を紹介するために出版物の発行が企画された。そして、我が国の彗星観測や軌道計算を紹介するために東亜天文学会 (OAA) 彗星課の出版物として、長谷川先生と古川先生が監修する回報 OAA Comet Bulletin No. 1 が 1971 年 8 月 1 日に発行されることになった。なお、この回報は、今も引き続き発行されている。

先生が軌道計算に励まれていた頃に私は、先生と知りあった。しかし、もっとも、先生を鮮明に覚えているのは、1973 年に大阪で開かれた OAA 総会でのことであった。そこでの研究発表で座長は故村山定男先生であった。村山先生は、私の発表を止めることなく、1 時間以上の長い間、研究発表をさせてくださった。そのとき、開いたドアの片隅で煙草をくわえニタニタ笑いながら、私の研究発表を聞いている黒い背広を着たかっぷくの良一人の方がいらっしゃった。それが古川先生であった。そのお姿は、まるで当時に放送されていた TV ドラマ「アンタッチャブル」に登場する暗黒街のギャングのボスの一人、フランク・ニッティーにそっくりであった。『何と怖そうな先生だなあ…』というのがそのときの古川先生に対する私の最初の印象となった。



写真 2. 木曽観測所 105-cm シュミットのドーム (1977 年 12 月 11 日).
左より太田原明氏、渡辺和郎氏、私、古川先生、香西洋樹氏、
前日に 70P/小島彗星を検出。

1976 年になって、私は、日本天文学会の大塚奨学金を受け、「特別摂動の数値計算」の研究で、東京天文台天体掃索部 (当時) で活躍されていた先生の元で指導を受けることになり、当時の天文台の大型電算機を使用させていただいた。そのとき、私と故番野欣昭氏による軌道計算のプログラムは、ほとんど完成していたが、それらは、すべて FORTRAN 言語で書かれたものであった。しかし、先生からは、

PL1 言語でプログラムを書くことを薦められた。先生の指導を受けた 1 年間の間にプロの怖い先生という私の印象は変わっていった。

1977 年には、当時、多くのアマチュアが興味を抱いていた軌道計算について、位置天文学や天体力学の普及を図るため、主にアマチュアを対象にした勉強会を行なうことを古川先生に引き受けていただいた。先生の提案で勉強会の名を「ガウスの会」とすることとなった。そして、1977 年 5 月にその 1 回目の勉強会が行なわれた。資料によると、勉強会は 12 月には第 8 回目まで進んでいるが、そのあとの記録がないため、このあと、どうなった

かは、私の記憶に残っておらず定かではない。しかし、このガウスの会は、今、参加名簿を見直すと、1回でも参加した方を含めると総勢にして約50名近い方々が参加している。中には、思わぬ人の名前も目にするほど、当時は、軌道計算に興味を持つアマチュアが多かった。

この時期、先生は、岡山の188-cm望遠鏡や木曾の105-cmシュミットを使用して太陽系内天体の精密位置の観測にも励まれていた。木曾シュミットでは、同僚であった香西洋樹氏とともに小惑星の捜索も行ない1976年から1986年までに多数の小惑星を発見し、その中の91個の番号登録小惑星について命名権を得られている。

1982年から4年間、私は東京に戻っていた。その頃、私は、急速に発達したマイコンを使用した書籍を著作したり、テレビにも出演していた。うれしいことに、今でも「中野さんのテレビを見て、星に興味を持ちました」と言ってくさる方がいる。東十条に住んでいた私は、毎月のように先生のご自宅を訪問していた。また、先生には、ときどき、私の自宅を訪れていただいた。大泉の小林隆雄氏は、私



写真3. 米国出発送迎会（第2回目、1986年8月31日）。
左より浦田武氏、富田弘一郎先生、古川先生、私。

の当時の自宅で、先生と初めて会われたという。その時期、先生は、口癖のように「軌道計算で金が稼げるとは思わなかった」と言われていたことを思い出す。この頃には、先生は、暖かい家庭の味をほとんど知らない私を実の家族のように扱ってくださった。

私がハーバード・スミソニアン天体物理学センター（ハーバード天文台）に1986年から1990年まで研究員として勤務していたとき、1988年にボルチモアで開催されたIAU総会にあわせて、訪米された大先生一行とお会いすることができた。この会議には、友人の長谷川先生、富田弘一郎先生も出席された。先生ご家族とは、ニューヨークやカナダまで足を延ばし、ナイアガラ瀑布を観光した。さらに先生は、わざわざ、アーリントンにある私の自宅まで足を伸ばされた。自宅に入る前に部屋の構造に違和感を感じないように『米国の



この方が広々として合理的ですよ』と説明して入室いただき、楽しいひとときを過ごした。また、私が米国にいた一時期には、先生のご自宅にパソコン通信のサーバ（OAA/CS）を置かせていただいたこともあった。

写真4.
ボルチモア IAU 総会（1988年）。
左より長谷川一郎先生、私、
ムルコス氏（クレット天文台）、
湯浅学氏、古川先生

1990年に帰国した私は、移動の激しいコンピュータ業界や広告業界に知り合いもなくなり、今の洲本に居住することとなった。1990年代初めは、1か月に1回くらいは東京に出かけて、その頃の業務に必要な資材を購入していた。この際、ときどき、先生のご自宅にお邪魔し、お話をお伺いすることが楽しみであった。しかし、1998年頃から始まったインターネット・サービスの発展によって、わざわざ、東京に出かける必要もなくなり、買い物や所用を行えるようになった。そのため、先生とも疎遠となってしまった。それでも、天文台で会議などがあったときは、ときどき、ご自宅にお伺いした。2011年に先生は、一度、入院されたことがある。そのときは、松戸の太田原明氏とともにお見舞いに行かされた。



写真5. 小惑星センター職員との夕食会（1988年）。
左よりマースデン博士、古川先生、私、バードウェル氏奥様。

4年前の2012年元旦に先生からの届いた年賀状に「きみの手を握って死にたい」と書かれていた。『これは、一度、ご様子をお伺いに行かなくては……』と思いながらも、ついにその機会がなかった。今年5月5日には、長谷川先生のお葬式に行ってきたことを報告しようと先生に電話を入れた。このとき、先生のお声が「か細い」ことが心配であった。そして、5月11日になって、奥様から「本日、入院しました。お医者さんから危ないと言われています。一度、会っておいてください」という連絡をいただいた。あわてて準備を整え、5月13日に川崎の品川征志氏と杉並の蓮尾隆一氏とともに先生のお見舞いに出向いた。そのとき、先生は、療養のためか、やせているもののお元気そうに私には見えた。『何だ。お元気ではないか。まだ大丈夫だ…』と思いながら、病院の1階で奥様とお話しているとき、先生の病室に忘れ物をしたことに気づいた。

一人で病室に戻ると、先生は、何も話さず無言ではあったが「おお…、戻ってきたか」と言われたような気がした。さらに、目で「さあ…、手を握ってくれ」という動作をされたように私には見えた。私は、年賀状を思い出して『でも、そんなことすると先生は死にます。とても握れません』と無言で答えた。すると、先生は、再び、「さあ～、握ってくれ」と無言で言われた。私は『そんなことできません』と心の中で答え、一礼して病室をあとにした。今思えば、あのとき、なぜ先生の手を握れなかったのかと先生を失った今、大いに悔いが残っている。



写真6. ハグーIAU 総会（1994年）。蓮尾隆一氏の招待を受けて、左より蓮尾氏、私、古川先生と奥様、富田先生奥様、長谷川先生と奥様、富田弘一郎先生。

6月中旬になって、奥様から「お医者から7月までは生きられないだろうと言われました」という連絡があった。私には「でも、あのとき、お元気であった…」とその医師の話が本当だとは信じられず、『1日でも長く生きて欲しい』と思わずにはいられなかった。しかし、6月29日朝、奥様から訃報が届いた。奥様は「最後に中野くんによろしく…と言って亡くなり

ました」とのことであった。奥様の言葉が訃報を知って、がく然としている私を励ますお言葉であったとしても、そう思われたことは、身に余る光栄であった。

先生と同じ時期に軌道計算者として活躍された新座の大石英夫氏がまるで長谷川先生に呼び寄せられるように6月6日に逝去された。享年86歳。そして、今度は古川先生であった。大石氏は、古川先生のご友人で、古くから神田茂先生の元で小惑星の軌道を手計算で行なわれていた。氏は、1988年までに2000号以上の日本天文研究会計算部回報(JAMPC II)を発行されている。1984年に大石氏のご自宅をお伺いして、『計算は、何でやっているのですか』とたずねると、「きみの『マイコン天文学 I (1983年発行)』のプログラムを全部入れたよ」とのことだった。

『ええ、そんなことしなくとも、コピーを上げましたよ』とびっくりして答えた。それ以来、氏には、小惑星データとプログラムの更新をお世話することにした。大石氏も、また、米国に所用があるごとにボストンまで足を延ばされた。あるときは、 -20°C の極寒の日に訪問され、その寒さにびっくり



写真7. 私の大先生(1991年)。前列左より、富田先生、長谷川先生、古川先生、大石英夫氏。

りされていた。ところで、先生のお葬式から戻ると大きなお品が先生から届いていた。発送日を見ると6月29日、つまり、先生の亡くなられた日である。『いったいこれはどういうことなんだろう』と思いながら、お礼状を奥様にお送りすると「品物の件ですが、主人が亡くなる前日(6月28日)に自分の死を予期したように「中野くんは、一人者だから手のかからない栄養のあるものを送ってあげるように…」ということで、主人の好きな日比谷公園の中にある松本楼のカレーとホテルスープを近くのデパートよりお送りいたしました。どうぞ、召し上がって、少し太ってください」という返答をいただいた。お見舞いの日には「中野くん。少しやせたなあ…」とあとで奥様に話され、私のことを気になさってください、そして、亡くなる前日まで気をお使いいただいた大先生には、お礼と感謝の言葉以外、思い浮かばない。

まして、最近、どうしてこんな世になったのかと思うほど、今の世の中、つまらぬ社会行為から、不遇、失意の人生をおくる人たちが多く、二人の大先生にこのように好かれた私は、実に幸せな人間であった。先生たちに感謝したい。また、若いときから尊敬する大先生がたにお仕えできたことを誉れとして、今後の人生を生きて行きたい。